

魂魄妖夢四番勝負 番外

折葉坂三番地





## 目次

輝く針の剣	3
幻想郷の鰻	23

# 輝く針の剣

冥界白玉楼。徳高き文人墨客の魂が、輪廻を忘れてひととき安らぐ場所。最近はなんだかちよつと安らぎすぎてるんじゃないかと思ったり、いい加減頭界との結界が開きっぱなしなのどうかしなくてもいいのかなと思つところもあるが、基本的には穏やかなあの世の一角である。

——そんな楼閣の、二百由旬の庭に。

「たのもーお!!」

実に威勢のいい挨拶が響き渡ったのは、春の足音もまだ遠い、二月の頭の頃であった。

「たのもーうっ!!」

冷えた空気を震わせて凜と響き渡る済んだ声。

その主は身の丈およそ三尺あまり。綾目辻花の赤い振袖を翻し、渋茶の帯にたっぷりとレースのフリルを

あしらったスカート。菫の髪は短く揃え、仰ぎ被るは笠の代わりの椀の蓋。

腰には二尺足らずの針の剣を佩き、背に黄金色の小槌を背負つて。身の丈足らずとも英姿颯爽ならんとはかりに立つ、小人族の姫君であった。

「私は小人族の末裔、少名針妙丸! この白玉楼の庭師に一手お手合わせをお願いしにやってきたわ! 鬼退治の英雄にして我らが太祖、一寸法師の名において、幻想郷一の剣士の座を懸けて勝負しなさい!!」

「……はあ」

突然の挑戦状に庭の手入れの手を止めて問い返すは、半人半霊の庭師にしてここ白玉楼の剣術指南、魂魄妖夢である。

師にして祖父、魂魄妖忌の後を継ぎ、鬼に鶴に死神にと打ち勝った百戦錬磨の使い手は、しかし現在腰に手拭い、脚絆に地下足袋、半纏姿とまるきり植木屋の体。半霊の支える脚立の上、ぱちんと植木鋏を鳴らして枝葉の手入れの最中であつた。

「さあ、隠れてないで出てきなさい！ 腕に自慢があるなら、まさか臆したとは言わないわよね！」

「えーと……」

泥で汚れた前掛けを擦り、胡乱な表情の妖夢を気にすることなく、針妙丸は自信ありげに胸を張ってみせる。妖夢もだいぶん背の低い方だが、彼女はそんな妖夢をなお見上げるほどのちびっ子だ。話に聞く一寸法師とまでは行かないが、なるほど確かに小人の姫であるのだろう。

それでも、彼女の表情は自信に充ち溢れ、まさに英雄野を往くがごとし。己が行く先にこそ道は拓けるのだと信じてやまぬ力強さが漲っていた。

「……………」

「……………」

ぱちん。閉じた植木鉢とともに、松の枝が地面に落ちる。しばらくの沈黙の後に、妖夢は口を開いた。

「その」

「なにかしら!!」

爛々と目を輝かせて振り向く針妙丸に、妖夢は白玉楼の縁側を指し示し。

「後ほどお話は伺いますので、ひとまず、片付くまでお茶でもいかがでしょうか？」

「そうね！」

もてなしのお盆を乗せて戻ってきた半霊を示す妖夢に、小人族の姫君はまこと寛大に頷くのであった。



「要するにね。問題なのは幻想郷の鬼たちなのよ」

両手に丼でも抱えるようにして、ふうふうと大きな湯呑みを冷ましながら、縁側に陣取った針妙丸はひとりうんうんと頷いた。

「私はね、しばらく前にここに来たばかりなんだけど。……あ、知ってるわよね？ 例の下克上異変。あれの

首謀者が私よ」

えへんと胸を張ってみせる小人の姫君。件の異変で

は巫女にとつちめられ、こっぴどくお仕置きをされたはずだが、なんら恥じ入ることは無いようだ。

下克上異変。打ち出の小槌の力によって、道具が意志を持ち勝手に動き出し、主に取って代わろうとした騒動である。巫女のお払い棒や魔法使いの八卦炉同様、妖夢の愛刀たる楼観剣・白楼剣もその影響を免れなかった。

……が、動き出した二刀は意気揚々と宙を舞い、勝手に庭の手入れをはじめたため、大した被害は出ていない。むしろ仕事が始まりたいそう重宝したほどだ。

「色々あって落ち着いてから、幻想郷にも鬼が住んでいるのだという話を聞いたわ。せっかく故郷を出てきたんだもの、私は小人族の末裔として、英雄一寸法師様のように鬼と相見えなければいけないのよ。そして正々堂々戦って、華麗に勝利をおさめなくちゃ！　そうでなきゃご先祖様に申し訳が立たないわ。

……それなのに！」

ぷうっと頬を膨らませ——まるで栗鼠のようだなと

妖夢は思った——針妙丸は不満げだ。

「それなのに！　一体どういふことなのかしら。妖怪の山というのに鬼が住んでいたという話を聞いて行ってみれば、もうとくに逃げ出したって言うし！　その首魁だったっていう鬼の四天王が天界に居座っているって話だから行ってみたら、べろんべろんに酔っぱらって、まるで話になりやしないじゃない！　どういふことなのかしら！」

「はあ、それは……」

妖夢としては酔っ払っていない鬼などというもののほうがよっぽど不気味なのだが、針妙丸はそれがお気に召さないらしい。

「本当に困ったものだわ、まあ、四天王って言うんだから他にマシなのがいるだろうって思って探してみたんだけど、地底で美人の橋姫さんを抱えて酔っぱらってたり、もう鬼は引退したから鬼退治だなんて言われても困るとか言い訳したり！　一体全体。どうなっているのかしら、ここの連中は！」

ぶりぶり、まるで頭から湯気でも吹き出さんばかりだ。針妙丸の頭の上でお椀の蓋がパタパタと揺れるのを見て、妖夢はふと晩御飯のおかずはどうしようと考えたりした。

「それでね！ その情けない鬼が口を揃えて言うことには、自分達を負かした強い剣士が他に居るから、そいつに当たってくれて言うのよ」

「はあ」

生返事の妖夢の頬が、いきなり左右からがっしりと掴まれる。身を乗り出した針妙丸は唾を飛ばさんばかりの勢いですいと妖夢の顔を覗き込んだ。

「はあじゃなくて！ 貴方のことよ！ 貴方のー！」

「うえ!?」

伊吹の童子も、星熊の大鬼も、茨木の隻腕も。鬼達は揃って、自分達よりも強い剣士が冥界白玉楼に仕えているからと、そう言ったらしい。

「おかげで幻想郷じゅう、すっかりあちこちたらい回しよ！ 一寸法師だからって馬鹿にしてるわ！ これ

で違いますなんて言ったってもう許さないんだからね！」

「えっと……」

詰め寄る針妙丸に気押され妖夢は言葉を失う。とばかりいいところだ。それにしてもどこかの仙人、露骨に正体ばらしてるけど良いのだろうかと思ったりもした。いや今更か。

「それとも、貴方が鬼を退治したっていうのは嘘なのかしら？」

「いえ、確かに勝ちましたけど、あれは——」

「それなら話は早いわね！」

説明しようとした妖夢の言葉を遮って。小人族のお姫様は満面の笑顔で手を打ち鳴らす。

——刹那。

「ツ——!?」

傍らの楼観剣を、半霊と共に掴んで抜き放ち。

大きく後ろに跳んで距離を取った妖夢の頬に、ぴつと紅い線が走った。紅い血の珠がぷくりと膨らみ、つ



うと垂れ落ちてゆく。

風を切って放たれた鋭い切っ先は、庭師が咄嗟に抜き放った楼観剣の鐔元を打ち払い、さらに跳ねるように疾く妖夢の顔を狙ったのだ。

その正体は、針妙丸の抜き放った細い針剣。細い体からは信じられないほどの剣戟の衝撃が、妖夢の手をじいんと痺れさせた。

「へえ……。やっぱり鬼ね、嘘は吐いてなかったか」

輝く針の剣を、片手に抜いて半身に構え、不敵に微笑む小人の姫。

(……迅い……っ)

刃筋が全く見えなかった。熱を持ち始めた頬を自覚しながら、妖夢は齒噛みする。運良く柄頭で防げていなければ、今ごろ頭は串刺しだ。

「いざ尋常に勝負よ、半人半霊の庭師さん！」

脱ぎかけていた草履を蹴り上げ、宙空で器用に履き直し。たんと縁側から跳んで庭に降り。

くると回した針の剣の切っ先を向け、悠然と宣言

する針妙丸。

「いえ、あの」

「問答無用！ 手加減無用よ！ さあ行くわよ！」

勝負にしたって突然過ぎるだろうとか、まだ仕事の途中なんだけどとか、そもそも小人族の鬼退治ってそんなに必須なのかとか。

いろいろ言いたいことを全部黙って飲み込んで。

妖夢は、四尺七寸の大太刀を正眼に構え、小人の姫に向き直った。



姫の通り名通りの艶やかな振袖姿と、その小柄な体躯に、侮っていた事は否めない。

しかしそれを差し引いても、針妙丸の剣は妖夢の想像をはるかに超えて鋭かった。

「どうしたの、だらしないわね！ それが鬼を退治した剣士の剣なのかしら!？」

神速の踏み込みから繰り出される剣尖、まさに雷光の如し。速く、鋭く、そして剛い。わずか二尺足らずの細剣は、四尺七寸の大太刀という大業物でもって、打ち払うどころか掠らせるのが精一杯だ。

「ッ……!」

たちまち傷だらけになる庭師を前に、小人の姫はいささかの油断もなく、勇ましげに針の剣を振りかざす。

「甘い!」

空を裂き、うねる切っ先が音よりも速く庭師の二の腕を弾く。ひゅんと空を裂く刃が、白い玉砂利にぱつと鮮血を散らした。

針妙丸の剣は、妖夢の知るいかなる流派とも違って、軽く羽子板を扱つかのように構えた手首を返し、鋭い切っ先を撓らせて撃ち穿つ。その踏み込みは庭の玉砂利を乱すことなく、羽根のように軽やかだ。

何よりも特筆すべきは、その間合い。

妖夢よりも頭一つ低い針妙丸の剣が支配する空間は、距離を自在にする死神よりもなお広い。朝な夕なと二

百由旬の庭を駆け廻って鍛えた妖夢の剣をはるかに超えて、より遠くまでをもやすやすと刺し貫くのだ。

小人の姫君が意気揚々と赤い振袖を翻せば、一呼吸に十度を軽く超える鋭が、妖夢の衣服をかすめ、剥き出しの肌に深々と傷痕を刻む。

その一撃は速く、鋭く、そして重い。気付けば、景勝たる白玉楼の庭はいくつもの大穴を穿たれ、惨憺たる有様。

(これが、鬼を倒した一寸法師の剣……!!)

妖夢はこれまで、白玉楼剣術指南の名の元に、難敵と幾度も立ち合い、そのたびに楼観・白楼の二刃をもってこれに応じてきた。

妖夢が刃を合わせた彼らは皆一様に、妖夢よりも強大な力を持ち、妖夢よりも恵まれた体躯を誇っていた。妖夢は彼らに二百由旬を駆ける脚と、剣の速さで打ち勝ってきたのだ。

だが、彼女は違う。この小人の姫は、妖夢よりも小さく、妖夢よりも疾い。

これぞ、輝く針の剣。わずか一寸の身長で、山のよ  
うな巨軀の鬼を退治した、英雄一寸法師の剣。

「どこを見てるのかしらっ！」

低く地を這う楼観剣の横薙ぎを、深く被った腕兜で  
打ち弾き。針妙丸の切っ先が泳ぐ妖夢の手首を深々と  
斬り裂く。柄頭を返して致命傷となる先端の刃筋こそ  
反らしたが、手首にずきりと激しい痛み。鮮やかな血  
華が玉砂利に散る。

刹那。輝く針は宙を奔った。

きらめく鉞は広大な庭の端から端までを駆け抜け、  
冥界の四方無辺を無尽に刻む。

(しま、っ)

そう。針。彼女の剣は、針なのだ。

ゆえにその尖端は一刺しには留まらず、繰り返し折  
り返して続くのである。

一度防いだくらいでは止められない。相手の間合い  
にはつれを見出し、見渡す限りを一繋ぎに縫い止める、  
一寸法師の針の剣。

「――輝針剣、天衣百縫」

精妙なる技巧を余すところなく編み込んだ、一瞥百  
回の返し縫い。跳び退ろうとしたその足が、光の針に  
貫かれ、紡ぐ軌跡に靡られて。妖夢の下半身は地面へ  
深々と縫い止められる。

そして、そこで止まりなどしない。

雷光のごとき速度で繰り出された針が、輝く軌跡を  
残し、妖夢の胸を深々と刺し貫いた。

「――ねえ」

霊力の糸をそっと歯で噛み切り、血の滲む切っ先を  
ひゅんと振って。

小人の姫は、つまらなそうに振り向いた。

「そんなもののなの？ 冥界の剣士さんっていうのは」

どろん。針剣に串刺しにされていた妖夢の姿が白く  
煙に包まれ、消える。

じたばたともがくのは、幽明の苦輪で身代りになっ  
た半霊だ。椀蓋の笠を傾け、針妙丸が肩越しに視線を  
向けるその先で、庭師は膝を付いて荒く息を繰り返し

ていた。

(……強い)

自由を奪われた足を見下ろし、冥界の庭師は臍を噛んだ。四尺七寸の楼観剣を杖代わりに、かろうじて膝立ちを保つ。

「ッ……痛あッ」

白楼剣の切っ先で、足を縫い止める糸を千切り、強引に身を引き起こす。

咄嗟の符宣言で致命となる一撃こそは避けたものの、輝く針の剣に縫われた足は思うように動かない。それは取りも直さず、妖夢の剣の最大の強みである機動力を奪われたことを意味していた。

「……う、あ」

足に走る激痛に思わず目を閉じかけた、その意識の死角に滑り込むように。

「余所見なんかしていいのかしら？」

あ、と思う間もなく、綾目の振袖が視界を埋める。容赦なく眉間を刺し貫かんと打ち出される小人姫の

切っ先を、半人半霊の庭師は紙一重で躲す。背後で玉砂利が弾け、地面に大穴が穿たれた。

妖夢はすれ違いざまに身を翻し、腰裏から抜き放った白楼剣を一閃させる。逆手握りの迷食の刃は、がきりと音を立て、針の刃と噛み合った。

「残念！」

しかし。針妙丸はいささかの動揺もなく、神速で剣先を引き戻していた。

ぎゅるん。うねる蛇のごとく。螺旋を描いて絡み付く針剣の先端が、反対の手の楼観剣を這い登る。

一振り十殺の異名を誇る四尺七寸の大業物を足場にして、牙を剥く毒蛇の銚。腕を巻き込み肩を裂いて、なお喉元に迫る刃を前に――

「まだ！」

妖夢はためらいなく楼観剣を手放していた。支えを失いわずかに揺らぐ針妙丸の隙を見逃さず、白楼の刃を振るう。

額の椀蓋兜でこれを受けさせ、針妙丸の視界をふさ

いだ妖夢は、白い腕を逆に捻り、少女の胸元を掴む。

切っ先のぶれた針剣を肩と顎で挟み取り、同時に丹田に気合を込めて一步を踏み込んだ。

轟音が空を震わせる。たとえ深手を負っても、二百由旬を駆け抜ける脚力は伊達ではない。玉砂利を跳ねさせ庭を揺らがす踏み込みと共に、小人の姫に肩からの当て身を見舞ったのだ。

魂魄流、炯眼剣——からの、折伏無間。体を崩したところに強かな一撃を喰らった小柄な身体は宙を舞い、遠く跳ね飛ばされて——地面との激突の寸前、くるんと身を回して着地する。

「……やるわね」

げほ、と咳き込む口元を拭いながら、針妙丸はゆらりと立ち上がった。

（浅かった……!）

一撃を当てた瞬間の、奇妙な衝撃の軽さを妖夢は感じていた。相手が自分よりも小柄だったことを失念していたのだ。威力は十分に伝わりきらず、大きな反動

となって針妙丸を弾き飛ばしてしまった。

それでも、妖夢の脚が万全であれば、二百由旬の庭の果てまで吹き飛ばす事もできたはずだった。

「ちよっと見なおしたわ。うん。そうそう。そうでなくっちゃ面白くないわね」

こきこきと肩を鳴らし、針妙丸はひとり頷いて微笑を浮かべていた。土埃で汚れた頬をぬぐい、その場をぴょんぴょんと跳んで脚の具合を確かめる。その表情には恐れも怯えも見当たらず、なお凛々と勇氣に燃えるばかりだ。

些かも、折れず、曲がらず、まっすぐに。

その通りだ。彼女は小人族にして、鬼退治の英雄、一寸法師の末裔。その小さな体に無限の勇氣を詰めこんだ、伝説の勇者の子孫なのだ。

（参ったな……）

苦境も、苦難も、構わず堂々と乗り越えて。針妙丸はどんな時も、己よりも強大で壮健な相手を前に、その小さな体いっぱい勇氣で挑み、打ち倒してきたの

である。

(これ、ちょっと……勝てそうにないかも)

これまでの試練とはまるで正逆の立場に置かれ、窮地へと追い込まれた妖夢の頬を、汗が伝い落ちた。



行き過ぎた針の先端が即座に翻り、庭師の二の腕を、頬を、首をかすめてジグザグに刻む。なびく靈力の糸は庭木をまとめてかがり縫い、地面を刺し貫いて大岩を縫い上げた。

弾き上げられた玉砂利の一粒一粒を微塵に砕き、舞い散る葉を一繋ぎに縫い止める精妙なる剣捌きは、なお鋭さを増していく。

「さあ、どうしたの!? もうおしまい!?!」

鋭き針の切っ先を油断なく構え、小人の姫は叫ぶ。赫赫たる振る舞いは威風堂々にして雄偉剣蘭。まさに鬼に挑んだ勇者の末裔のものか。

半人半霊の庭師も懸命に剣を振るってこれに応じんとするが、その旗色はひどく悪い。

一振十減の楼観剣も、迷喰の白楼剣も。魂魄の二刀は煌めく針の輝きに弾かれ、空へと反らされ、地へと撃ち落とされる一方だった。

鬼を下した針剣が閃くたび、鋭い縫い返しに妖夢の四肢を撃ち抜き、貫く。二百由旬の庭を駆け抜ける俊自慢の俊足も、出足を見定めて放たれる針先に地面へと縫い止められ、その動きを封じられた。

妖夢は無様に地を転がり砂利に塗れながら、苦し紛れの反撃と弦月の孤斬を振るうが、針妙丸は綾目辻花の振袖を鮮やかに翻しては、巧みな足さばきでそれを躲してゆく。

「魂魄『幽明求聞持聡明の——』」

「それはもう見切ったわよ!」

ならばと半霊を変じさせた分身が、背後より針妙丸に斬りかかるが——小人の姫はこれも蛇のごとき剣閃で一寸刻みに切り刻んでみせた。

同時、しゃらんと針剣を腰の鞘に収めるや否や、針妙丸は背から取り出した長い釣り竿を高々と振りかぶった。

「そおーれええいっ!!」

「んな……っ!」

テグスのきらめきを後に残して、海幸の釣針は空を奔る。針糸は狙い過たず妖夢の足を絡め取り、そのまま容赦なく宙へと引き上げていた。豪快なる一本釣りに、大根でもすっぱ抜くかのように放り上げられた庭師は、深手を負った半霊めがけて投げ飛ばされる。

「ぐあ……っ」

符を解除する余裕もない。受け止めるのが精いっぱいだった。自分同士の激突に成すすべなく倒れ込む庭師にめがけ。

「輝針剣——絵羽縫直し!!」

即座の抜剣。弧を描く刀よりも、針の刺突はなお速い。天頂を貫く一突きから息を継ぐ間もない連続の返し縫いが、妖夢を半霊ともども大地へと縫い止めた。

辛うじて跳ね上げた楼観剣の鞘で身体の軸こそ守ったものの、それ以外の部位には防御が間に合わない。小人の剣に四肢を無残に引き裂かれ、庭師は玉砂利の上に大きく膝をつく。半霊が力を失い、煙を上げて元の姿へと戻った。

——そして。

満身創痍の妖夢へ、容赦のない追撃が迫る。

「ええええ……いっ!!」

鋭い気合と共に、天より打ち下ろされるは、黄金色の小槌。

所持者の意志のままに、願いを叶える鬼の宝具が、その本来の大きさを取り戻して放たれる。

小人の体躯を遥かに超え、巨大化した黄金の一撃は地面に穿たれ、隕石でも降って来たかのように深々と大地を抉った。

冥界を穿つ轟音に、幽霊たちは隠れて怯え、並ぶ桜の梢が揺れる。

「っ、えほっ……」

激しい土煙の中、咳き込む半人半霊の庭師。

直撃の刹那、衝撃の瞬間に、妖夢は自分の胴に半霊をぶち当てて、間一髪、小槌の振り落とされた範囲から逃げ出していた。

地面に転がりながら必死に距離を取り、逆手に握った四尺七寸の太太刀を構え直そうとするが――

爆音と煙がいまだ収まらぬ中、土煙を裂いて飛ぶ輝きの軌跡。

咄嗟に振るった楼観剣の柄。塚元の茎なかごを深々と貫いて。きらりと光る切っ先が妖夢の目の前に迫る。輝く針の剣は魂魄の刀すらも貫通してみせた。

歯を食い縛り、妖夢は太太刀をひねってそれを撃ち返すが――もはや少女の四肢は傷だらけ。四尺七寸の太太刀をもってしても、細い針の切っ先を弾くのに精一杯だ。

「ぐ……っ」

無理に動かしただけで傷が広がったのか、手首から溢れた血が、白い玉砂利に紅い花を散らした。

地に膝をつく庭師を見下ろして。右手には英雄一寸

法師の針の剣、左手には鬼の祭器、打ち出の小槌。

鬼を下した御伽噺の勇者の証を掲げ、進撃の小人は意気軒昂と妖夢に迫る。

「ふふん」

「……………っ」

くると、腕の蓋を指先でもて遊んでは帽子のように頭に乗せ直し、針妙丸は口の端を持ち上げた。

自信に満ちた少女の笑顔。

しかしそれは過信ではなく、確かな実力と、底知れぬ勇猛さに裏打ちされたものであることを、妖夢は痛いほど思い知らされていた。

(……鬼よりも、強い)

少名の輝針剣と、魂魄の二刀。相性の問題がないとは言えない。けれどそんなものは無関係に、針妙丸は単純に妖夢よりも鋭く、そして速いのだ。

師より受け継ぎ、白玉楼を守るために磨いてきた魂魄の二刀。この小人の姫の技量はそれを上回るものな



のだ。その事実を眼前に突き付けられ、思い知らされて、妖夢は齒噛みする。

己の未熟に。未だ知らずにいた強敵の存在に。

(いつの間にか、思いあがっていたんだ)

おおよそ。剣においての勝負ならば。

格闘や弾幕というくりではなく、単純な剣の技量でならば。幻想郷において自分に勝てるものなどそう居ないだろうと。明瞭ではなくとも、そう考える慢心が確かに、魂魄妖夢の心の中にあつたのだ。

ゆえに妖夢は、同じ剣を使う相手を想定した鍛錬を知らず、どこかで怠る気持ちがあつた。

鬼や、鵺や、死神や。少しばかり強大な妖怪達との戦い身を投じ、その中で勝ちをおさめて。多少ならずとも天狗になっていたのだ。

挑むのはいつも自分。相手は巨しく強大で、いかな攻撃も通じず、ゆえに自分はどうにかして工夫を凝らし、その突破口を探す。

倒されても諦めずに、もう一度立ち向かう。そうす

れば、いつか――

(いつかは、きつと?)

ああ、いつからだ。

いつから、それが当たり前になっていた。

(諦めずに挑み続ければ、いつかは勝てる。そうやって、何度も何度も負けても最後に勝てば、それで自分の勝ち。そんな不公平を、私は勝手に相手に押し付けてきたんだ)

挑まれて初めてそれに気づくなんて。己の心に巣食っていた慢心をはっきりと自覚し、力の入らない手足を引きずって、ゆっくりと妖夢は起き上がる。わずかなばかりの自嘲と共に。

「お、まだ降参しないのね? いいわねえ。そうでなくっちゃ面白くないわ」

「……認めます。確かに、あなたは強い。鬼を倒した小人の末裔というのは、本当なんですわ」

白楼剣と、楼観剣と。ふらつく足を背中から半霊で支え、師より受け継いだ二刀を手に、妖夢は白玉楼を

背にして立ち上がる。

「そうね。でも正直がっかりだわ。幻想郷の鬼達は、そんなあなたに負けちゃうくらい腑抜けているみたいだから」

「いえ」

庭師は静かに首を振った。針妙丸は確かに強い。お世辞にも恵まれているとは言えない体格で、想像を絶する修練を積んで来たのだろう。

（——違う。そうじゃない）

そうではない。小人族の彼女にとって、体格の不利など当然。息をするよりも自明のことだ。針妙丸は己の体躯を不自由に感じたことすらないのかもしれない。彼女の剣にそんな雑念がないことを、妖夢は合わせた刃から感じ取っていた。

けれど。

その上で、妖夢にだって彼女の言葉を認められない理由がある。

自分の未熟を咎められるのは構わない。

けれどこれまでの戦いを、その相手を侮られるのは、勝負に臨む矜持にかけて、あってはならない事だ。

彼女達に相対し、打ち勝ってきた妖夢には、その強さを背負って立つ責務がある。

「勇儀さんも。萃香さんも。私とは比べ物にならないよりも強かった。私ができるのは、ただ、斬ることだけでした」

「？　どういうこと？　あなたが勝ったんでしょ？」

「勝ったんじゃない。勝てただけです。鬼を、鶴を、斬ってこいと。幽々子様がそう言われたので、私はただそうしただけでした」

その結果、ただ勝つことができただけ。そう口にする妖夢に、針妙丸は小首を傾げるばかりだ。

傷付いた身体に活を入れ、妖夢は己を律する魂魄の二刀を構えなおした。

「この剣は、師匠が残してくれたもの。お祖父ちゃんが教えてくれようとした剣がどんなものだったのか。結局私にはわからないままでした。……だから、ずっ

と探してきた。いろんなものを斬った。そうやってきて分かったことが少なくとも、ひとつ」

一息。

「――斬れば、分かる。私にとって魂魄の剣は、そういうものだと思います」

針妙丸は確かに強い。わずか三尺――本身五寸の身の丈に、途方もない勇気と大望を抱き、自分よりもずっと激しい修練に身を委ね、俯くことなどせず、見上げる巨軀とも互角に戦えるように鍛え上げてきたのだろう。

けれど。それは。

妖夢が勝負を諦める理由にだって、ならないはずだ。

「雨を斬るのに三十年。空気を斬るのに五十年。お祖父ちゃんに、師匠に憧れて、ずっとこの二刀を振ってきてました。あの背中に、少しでも追いつけるように。それ以外のことなんて、考えてもいなかった」

だから。

「私にはこれしかできません。だから、勝てる勝てな

いじゃない。――あなたの剣も、斬ってみせます」

楼観剣と白楼剣。二刀を左右に構え、真っ直ぐに見つめる先――針妙丸もまた、にっと歯を覗かせた。

「言うわね。ちよっとはらしくなってきたじゃない。

じゃあ、――次で思い知らせてあげるっ!」

挑発に乗りながらも、針妙丸の剣捌きは恐ろしいほどに冷徹だった。まるで弓矢のごとき早撃ち。最小限の動きで抜剣し、返す手首から唸るように放たれる針の天衣百縫。鋼の大蛇を思わせる切っ先が、幾重にも重ねて空を刻む。

それを前に。

妖夢は臆することなく前に出た。

「っおおおおおおお!!」

魂魄の剣には。師より託され、受け継ぎ、その先を歩まんとする二刀には、まだ、果たしていないことがある。

だから、それを試すまでだ。

右の腿を。左の肩を、頬の傷を撃ち深々と抜く輝く

針の剣を、ものともせず——半人半霊の庭師は、裂帛の気合を込めて、二刀を振るう。

——天星劍「涅槃寂靜の如し」

瞬間。白い閃光と共に、一切の音は消え去った。

二百由旬を誇る冥界の庭。二者の身体が、静寂の中に沈み込む。

交錯は刹那。

妖夢と針妙丸、瞬きよりも速く二百由旬を走り抜けた両者は、それぞれに離れた場所に静止した。

「——ッ!？」

交えた剣戟の後、表情を変えたのは針妙丸。

力強く振り抜かれた庭師の双剣。その先で。

小人姫の輝針剣はその長さを半ばで断ち切れ、くるくると宙を舞っていた。

音もなく二つに両断され、地に落ちる一寸法師の名刀を前に。

妖夢は楼観白楼の二刀を手に、深く地に沈み込んだ姿勢のまま、残心を取った。



「そんな……!? どうして!？」

音の戻ってきた庭に、小人の姫の驚愕の音が響く。半分に折れた剣を、半ばで斬られた刀を、信じられぬというように何度も首を振って。

これまでも、立ち向かう数多の敵を打ち倒し。

四尺七寸の大業物と真っ向打ち合って、刃毀れひとつしなかった筈の針の剣。それがあっさりと碎けたことに、針妙丸は動揺を隠せない。

「この針は、ご先祖様の……一寸法師様の剣なのよ! これくらいで折れるなんて——」

「そう、折れるわけない。斬れるはずがない」

途切れた息、満身創痍の手足。がくりと膝をつきながら、妖夢はびっしょりと汗の浮いた額を拭う。

「でも、今日なら別です。もしあなたが挑んできたのが今日じゃなかったら、間違いなく、負けていたのは私でした」

「まさか——っ!？」

電撃に撃たれたかのように、針妙丸が声を上げて振り仰ぐ先。白玉楼の居間に掛けられた、日捲りカレンダーがはらりと一枚、落ちてゆく。

「一日だけ——時を斬りました」

雨を斬るのに三十年。空気を斬るのに五十年。

そして、時を斬るのには二百年。

妖夢に剣を教えた師は、数少ない言葉の中で魂魄の剣をそう語ってみせた。

極限の交錯と激突の最中。その極意を、ほんのわずかに一瞬だけ。妖夢は果たしてみせたのだ。

——斬れば、わかる。

ただ一心に、己に課した信念のままに。

「事八日——っ!？」

二月七日から、一日だけ時間を斬り飛ばして。明く

る今日は二月八日。

針供養の、事八日である。

折れた針、錆びた針を労わるこの日は、道具としての針の力が最も弱まる日でもあった。いかな祭器、鬼殺しの一刀とても、宿した性質までは変わらない。

鬼を下した一寸法師の針の剣は、針であるがゆえにその身を形作る制約からは逃れられなかったのだ。

「ぶつつけ本番、できるかどうか、分かりませんでしただけ」

勝ったということそのものより、自分の成した業そのものを誇るように。

静かな、けれど確かな笑顔で、ついに力を使い果たした妖夢は、そのまま庭にどさりと身を投げ出した。

くてりと倒れた半霊もそこに寄り添って、緩やかに着地。もう指一本動かせない。

けれど、心はどこか晴れやかだ。

半ばで折れた剣と、切っ先と、一枚進んだ日捲りを交互に見て。

針妙丸は無言で半人半霊の庭師を見つめていた。



むっと熱の籠る工房に、小気味よい槌の音が響く。赤熱する炉の反射光を前に、前掛け頭巾姿のお化け傘は、色違いの瞳に真剣な光を宿して一心に槌を振るっていた。

「どう？ 直りそう？」

「任せて！ 針ならこの前たくさん直したからね！」  
力強い返答と共に、激しく打ち鳴らされる金床がぱつと火花を散らす。世間では無害なびっくり妖怪程度にしかわれていない多々良小傘であるが、一本踏輪の別名の通り、彼女には鍛冶を得意とする意外な一面がある。

ま二つに折れてしまった輝く針の剣の前に放心状態だった針妙丸を、流石にまずいと思ってここに連れてきたのは妖夢である。いくら勝負の結果とはいえ、や

りすぎというものはあるのだ。

二つ返事で修復を引き受けてくれた小傘に心から感謝して、半人半霊の庭師はほっと胸を撫で下ろしたのだった。不安で仕方ない様子の針妙丸に付き添って、朝から小傘の作業を見守ることはや半日。

ようやく形を見せてきた輝針剣に、小人の姫もどうか落ち着きを取り戻してきたようだった。

「それにね」

天目一箇神の係累たる彼女は、地の底の炎をもって鉄を鍛える。槌を振るい、時折焼き轆しを繰り返して針を元の姿に戻しながら、小傘は言う。

「そこの小人さんには、いろいろお世話になったし」

「……私？」

きょとんと瞬きをする針妙丸。彼女には覚えがないらしい。小傘はあははっと笑い、

「ん。こっちの話。とにかく安心して。引き受けた以上は万全を尽くすから！ なんだったら妖怪に特攻が付くように改造してもいいよ」

それは退治される側の妖怪の発言としてどうなんだろう、と思いつつも、妖夢はそっと胸にしまう。

きっとそういう一面は人妖問わず誰もが持っていて、誰かに知られたくない理由がある。

だから殊更に暴くようなことではないのだ。そういうのは人の醜聞に興味津々のブン屋にでも任せておけばいい。

針妙丸がやたらと鬼退治に固執していた理由だって、きっとそれと同じものなのだろう。

「？」

疑問符を浮かべたままの小人の姫に気付かれぬよう、くすくすと微笑みながら。妖夢は腰のベルトに収めた植木鋏をそっと撫でた。

# 幻想郷の鰻





「♪らららららららん、ららららららんらららん」

黄昏時を過ぎ、水色から紺へと変わる空は高く澄み、命芽吹く春の気配に満ちている。東の山の端には白い月が浮かび、穏やかな月光を地面へと投げかけていた。まもなく夜。妖怪達の時間の訪れを前に、早起き連中が畴から這い出す頃だ。

森の端に屋台を広げ、自慢の歌声を響かせながら今日の仕込みに励むのは、夜雀ミスティア・ローレライ。「♪らららららん、ららららん、ららんーらーらーららららららららん」

割烹着に三角巾の女将姿もすっかり板につき、夜雀は爪を引っ込めた白い手でむんずと目打ちした八ツ目鰻の腹を開いては内臓を取り、背骨を除いてゆく。

半身に落とした八ツ目は串を打ってから、酒を嘖き、

特製のタレに漬けて臭みを抜く。

なにしろ今日は満月だ。いつにも増して妖怪たちの客足が増す夜とあって仕込みにも気合が入ろうというもの。念を入れて仕込んだ雀酒が抜群の仕上がりを見せていることに満足し、夜雀女将の歌声も一層の艶を帯びる。

「らららー……ん？」

竹炭の火加減を確かめていたミスティアは、森の角が騒がしい事に気づいて顔を上げた。

夜雀の屋台の近くには、妖怪の山から流れる溪流がある。材料になる鰻や泥鰌の調達先であるほか、洗いや水にも便利のため、普段はここを利用しているのだ。

はてと首を傾げて目を凝らした先で、派手に水柱が上がるのはその直後だった。

「みょんッ!？」

鈍い叩きと共に、巨大な尻尾の一撃で溪流から叩き出された少女が飛来する。

「わあああ!? なに、なにっ!?」

飛び来る彼女の軌道が屋台直撃コースであることを察知し、ミスティアは咄嗟に屋台の前へ飛び出していた。

可愛らしい姿はしていても夜雀、立派な妖怪である。構えた両の爪をもって打ち出した弾幕で、容赦なく少女を狙う。爪弾の掃射がもたらす被弾音とともに、水飛沫を上げて岩場を転がるのは——白髪の半人半霊、魂魄妖夢。

物覚えのあまりよろしくないミスティアでも、その顔は忘れようはずもない、いつだったかの永い夜の異変で襲ってきた冥界の二人組の片割れである。

「な、なによ!? なにしに來たの!? あの幽霊に言われて襲いに來たのね!?」

あの桜色の亡霊にはさんざん齧られ、酷い目に遭わされた。黙って食べられてなどやるものかと、左右の爪に新たな呪詛の爪弾を装填し、不審者へ突き立てんとするミスティア。しかし。

「——食べないで!!」

「食べませんよ!!」

ずぶ濡れとなった庭師が反駁する。どういうわけか彼女は下着姿の半裸であった。トレードマークの剣も持たず、よろよろと立ちあがる妖夢に、ミスティアを害そうという気配は感じられない。

「食べないですから! 少なくとも私は!」

なおも警戒を解かぬまま爪を伸ばすミスティアに。げぼげぼとむせながら水を吐き、妖夢は両手を上げて、敵意のないことを示した。



「——鰻?」

「はい。……その、お騒がしてすみませんでした」

濡れ鼠の身体を有り合わせの毛布で包み、妖夢は炭火の前で震えながら答える。まだ三月、雪解け水の流れ込む溪流の中は相当に冷たいだろう。くしゅんと鼻

を擦る様子には、あの恐ろしげな冥界の庭番の気配はまるで感じられない。

いまだ距離を保ってはいるものの、ミステリアも困惑の中、彼女の言葉に耳を傾けるくらいには落ち着いていた。

まだ水も冷たいこの季節に、夜の川の中から飛び出してきた理由について、庭師が震えながら語るところによれば、事のあらまは、いつものごとく主人の無茶な要望に始まるものであった。

冥界、白玉楼を治める西行寺幽々子は、一足早く春を迎えた邸内に妖夢を呼びつけ、友人の歓待のために鰻を用意しろと申しつけたのだそうである。

『ねえ妖夢。今年も紫がそろそろ目を覚ます頃よ。だから鰻を用意して頂戴ね』

『鰻……ですか？ 鰻ってあの鰻ですよね？』

『うふふ。そう、幻想郷の鰻よ。そろそろあなたにもできると思つてね。久しぶりに紫をびっくりさせたいの。頼んだわよ妖夢』

まったくもって有無を言わせぬ調子であったという。無茶振りはいつものことだがと思いつつも、妖夢は途方に暮れるばかりであった。

なにしろ鰻は海から川を上るもの。内陸の幻想郷では滅多に手に入らないのである。

しかも、幽々子に聞くところによれば妖夢の師、魂魄妖忌が庭番を務めていた頃、春に鰻を振る舞うのは白玉楼の恒例行事だったのだという。妖夢はますます驚き、いよいよ己に課せられた難題の重さに気付いたのであった。

「それで、わざわざ川に飛び込んでまで鰻を探してたわけ？」

「はい。あちこちのお店に聞いてみたんですが、やっぱり見つからず……こうなれば自分で獲るしかないと思つたのですが、潜っている時に滝壺の主を怒らせてしまったみたいで……せめて妖怪鰻の一匹でも見つけられればと思つたんですが」

「いないわよそんなの。……食べるの？」

「幽々子様のご用命ですので……」

心底嫌そうな顔をしてみせるミステリアに、しゅんと頂垂れる半人半霊。さっきの尻尾はその時のものだろう。これで心底真面目なのだからまったく始末に負えない。命じられれば、鰻と一緒に自分の腹まで切りそうな気配である。

ミステリアは心底呆れつつ、出洩らしの番茶の湯呑みを渡してやる。

「でもさあ、今の時期、鰻とか無理じゃない？ 私もよく分からないけど獲れるかもしれない時期と全然獲れない時期があって、いまは全然獲れない時期の方よ」

「そんなあ……」

告げられた途端、みるみる情けない顔になる庭師。ふわふわと浮かんでいた半霊も、透明度を落としてぽてりと地面に横たわった。

「鰻の幽霊くらいならいるかもしれないけどねえ……。あ、八ツ目のほうなら用意できるけど？」

「……お気持ちではありますが、それでは幽々

様に申し訳が立ちません。やはりここはもう一度」

「ちよ、ちよっと、待ちなさいって！」

ぐいと番茶を飲みほし、立ちあがってまた準備運動を始める妖夢。居ないと言っているのに諦める気などさらさらないらしい。

余所の半分幽霊が溺れ死んで全部幽霊になったところでミステリアにはどうでもいいことだが、この溪流はミステリアの商売の漁場でもある。下手に荒らされてはたまったものではない。

本当に幽霊が住み着くようになったら、鰻だって不味くなるかもしれないではないか。

「ですが、諦めるわけには」

「だからそう言ってるんじゃないんだってば！ あーもう、いい加減にしてよっ」

ミステリアは痺れを切らし、妖力を込めた喉で歌い始めた。他者を夜盲にする夜雀の能力が庭師の視界を塞ぐが——鳥目になったはずの妖夢は、平然と溪流に向かって進んでゆく。

「え？　なんで？」

以前、同じ目に遭わせてやった時にはびっくりするくらい狼狽えていたはずなのに。妖夢の反応があまりにも違うことに驚くミスティアだが、当の庭師は氣にした風もなく。

「……そうか。雑念に惑わされることなく、心の目で捕えろと言うことですね。なるほど、そういうのもあるのか。ありがとうございます！」

「そんなのも何もないわよ！　ってか川を荒らすな！」

「大丈夫です！　離してください！」

「違あう！　行くなって言ってんの！」

たまらずツッコんだミスティアは、妖夢に追い縋り、襟首を掴んで力づくで引きずり戻そうとする。一方の庭師は、これも自分への試練だとばかり溪流へと歩みを進め、止まる氣配がない。

かくして不毛な綱引きがしばし続いた後――

「なにやってんの、ミスティア」

屋台前で揉み合うふたりの均衡を破ったのは、呆れ

顔の山彦、幽谷響子であった。



「響子さん？　おひさしぶりです」

「こんばんはー!!　ミスティアもこんばんわ!!」

今夜も変わらず元気な挨拶。心のオアシスとばかりに大声の山彦、相変わらずの絶好調である。

彼女がやってきたのは偶然ではない。いまや飛ぶ鳥落とす勢いの妖怪バンド・鳥獣伎楽の打ち合わせがてらと、ミスティアが屋台の接客を頼んでいたのだ。

二人に挨拶をした響子は、事情を聞いて腕組み。一人前に沙門氣取りだ。朝から晩まで念仏を聞かされていれば、門前の山彦だって立派に仏門の徒である。

「へー、鰻かあ……」

「さっきからいないって言うてるのにムキになるしさ。水場を荒らされちゃ困るのよね」

「でも、幽々子様の期待に応えない訳には……」

「だーかーらー!!」

「それならさ、捕まえるんじゃないくて、鰻になっちゃえばいいんじゃない?」

「……………」

言い合いを再開した二人の間で、我に秘策ありとばかりに微笑み。獣耳をばたばたと揺らして言う響子に、妖夢とミスティアは揃って顔を見合わせた。



「響子って、料理できたんだ?」

「えへへー。最近一輪さんに習ってるんだ。この前ね、聖様にも、親分さんにも上手くなったって褒めてもらったの! やってみると楽しいね!」

予備の割烹着を借り、響子はふふんと自慢げな顔。耳を押さえた三角巾もなんのその。スカートの後ろでは尻尾もばたばたとご機嫌である。

調理台の上には木綿豆腐に塩、醤油、砂糖、小麦粉

が少々。貴重品である海苔も含まれていた。いずれもミスティアが響子の指示通りに用意したものだ。

「もうすぐ開店時間だし、お客さんが来る前にやっちゃおうか。手伝ってくれる? ミスティア」

「……うん」

腕まくりと共に手を洗う響子の隣で、ミスティアはどこか半信半疑だ。そこへ。

「すみません、こんな感じで大丈夫ですか?」

半霊に明かりを持たせ、森の奥から妖夢が駆け戻ってくる。泥だらけの手が抱えるのは、たった今掘ったばかりの自然薯だ。

「わお! 上出来上出来!」

響子は満面の笑顔で耳を揺らし、自然薯を受け取った。たっぷりの水で泥を落とし、髭根ごと皮をこそげてすり下ろす。

とろろにするなら皮は残しておいた方が風味が出るのだが、今回は用途が違ったため避けておく。

「よし、っと」

程なく出来上がったすり鉢にたつぷりのところは、箸の先にぶるんと固まるほどに粘り気が強く、千切れない。それを確かめて響子はにっこりと笑顔。

木綿豆腐はあらかじめ布巾で包み、重石を乗せてしばらく水を抜いた後に裏越する。これにすり下ろした自然薯と各種調味料を混ぜ、よく混ぜる。

「で、お味噌くらいは柔らかさになるまで練ってね。

……ねえミスティア、八つ目の脂とかあるかな。ちょっと入れると風味が付きそう」

「了解」

すり鉢の前に答えるミスティア。一方響子は手を洗い終えた妖夢に向き直り、

「で、そっちの海苔は四つくらいに切って、その溶かした片栗粉を塗ってね」

「……こんな感じでしょっか」

「そうそう！」

「こっちもできたよ」

「ありがと。よし、じゃあ見ててね」

ミスティアの作った生地を柔らかさを確かめ、ふむと頷いた響子は、生地をそのまま絞り袋へ。

ケーキのクリームを絞る要領で、海苔の上に生地を乗せていく。

「そしたら、こっやってヘラで形を整えて、表面を竹串でこんなふうに、模様を入れて……っと。ミスティア、油大丈夫？」

「できてるわよ」

熱した油には軽く衣を落とし、一度沈んだ生地がすぐに浮き上がるのを確認。適温だ。成型した生地を滑り込ませるように油に落とし、からりと揚げる。

「浮いてきたら、海苔の方を上にしてキツネ色になるまでね」

「わかりました」

その間にタレを作る。濃口醤油に酒、みりん、ざらめ。こちらにも八ツ目の肝油を少々。いずれも等量になるように混ぜて煮詰める。

揚げたての生地に串を打ち、タレを漬けて染み込ま

せるように馴染ませたら、炭火で軽く表面を炙り……。

「よし！ 精進蒲焼き、完成!!」

「おぉー!」

山彦の手に高々と掲げられたのは、形も色合いも見事に再現された鰻の蒲焼きであった。

一切鰻を使わずにできた精進焼きにもう一度タレを馴染ませ、炊きたてのご飯に乗せ、山椒を振って出来上がりだ。

山彦の見事な手際に思わず左右から拍手がおこる。

響子はえへへと顔を赤らめた。

「すごいじゃん響子、へえー、山芋で鰻ねえ」

「一輪さんがとっても上手なの。よくやるんだ。親分とキャプテンが好物でさ」

命蓮寺では基本、肉食は厳禁であり、口寂しい思いをした信徒たちがめいめいに精進料理に工夫を凝らしているという。この豆腐と山芋の蒲焼もその一環であるらしい。

「お、なんだ、いい匂いがしてるねえ」

不意に背後から声。見れば、地底から御一行様の到着であった。綺麗どころの橋姫を伴った一角鬼や、釣瓶落としを抱えた土蜘蛛たちが顔を見せている。

「いつけない、もう時間だ！ お店開けなきゃ！ 妖夢、響子、手伝って!」

「え？ あ、はいっ」

「はい、いらっしやーい!」

すっかり日も沈み、今や満月を抱く春の夜。

あちこちから続々とやってくる妖怪たちに、ミステイアは暖簾を掲げて屋台の開店を宣言した。



——所は移り、冥界。

三月も半ばに差し掛かり、二百由旬の庭には、膨らむ蕾をちらほらと花開かせた桜が並ぶ。

穏やかな春の風がそよぐ客間、千年杉の卓子に向かい合うのは、冬眠から目覚めたばかりの八雲紫と、西



行寺幽々子であつた。

二人の前には湯氣を立てる精進蒲焼きの重が、春の訪れを告げる料理と共に並べられている。

「……幻想郷の鰻ねえ。懐かしいわ」

「うふふ。でしょう？ 妖夢に作ってもらったのよ。紫をびっくりさせたくて」

その言葉に、スキマ妖怪の表情にわずかな驚きが垣間見えたのを、春の亡霊は見逃さない。

「やっぱり美味しいわねえ」

鰻を使わない鰻に箸をつけ、そっと目を閉じる紫に、幽々子も微笑んで返す。

季節の移り変わりの趣を楽しみながらも、あつという間に幽々子の重箱は空である。慌てて半霊と共におかわりを用意しに走る妖夢であつた。

二人が箸を付けるまでは緊張の面持ちの庭師であつたが、結局、美味しければなんでも良かったのではないかと半ば脱力気味であつた。

「——山芋変じて鰻と化す、か。半人前もそろそろ卒

業かしらねえ」

かつての白玉楼剣術指南役が得意とした、春の鰻。少しばかりの懐旧と共に、新たな季節の訪れを噛み締めて。妖怪の賢者はそっと、口の端を緩めるのであつた。



あとがき

はじめまして、あるいはお久しぶりです。

折葉坂三番地の銅折葉と申します。この度はお手に取っていただきありがとうございます。

この本、「魂魄妖夢四番勝負・番外」は、白玉楼庭師にして剣術指南の魂魄妖夢が、鬼や鶴や仏や死神と戦う「魂魄妖夢四番勝負」の後日譚的位置づけの番外編となります。

激戦をくぐり抜けた妖夢のその後や、それ以外の白玉楼での日常。楽しんでいただければ幸いです。

今回、本編の再版にあたって収録した二編についてざっと解説を。

・「輝く針の剣」

ちょうど前作の「四番勝負」の頒布に前後して深秘

録の発表があり、その中に登場した針妙丸が一寸法師譲りの針剣の冴えを披露しており、そのことに驚愕しつつ、しまった本編に出すんだったと非常に悔しかったので、ツイッターでちょこちょこ書いたお話の加筆再録です。

フェンシングみたいな剣捌きで妖夢を圧倒する英雄・一寸法師の末裔みたいなのがやりたかっただけで書き始めたので、どうやって妖夢を勝たせるのかなんにも決めてなかったのですが、これまたそれに前後して発表されていた茨歌仙の事八日を思い出し、そこにオチを付けることで無事着地しました。再録にあたっては勝負を挑まれる側の視点からすこし本編のフォローなどをしております。番外編というよりは後日談で、五番目の勝負という位置づけです。

・幻想郷の鰻

二〇一六年三月一三日の名華祭10／幻想郷フォーラム2に参加した時、挨拶用兼小説サークルとしての

自己紹介に無料配布した豆本です。名古屋に美味しい鰻屋さんがありまして、そこに行こうとするたびにお店がお休みだったり大混雑で入れなかったりをあれこれとネタにされたので、じゃあ鰻の話を書こうと思った作品。

山芋の精進蒲焼というのは実在しておりまして、けっこう愛好している方も多いようです。また、これと直接関係あるかはちょっと分からないのですが、鰻は昔その生態が全く謎に包まれていたため、山芋が川に入って変じる魚であるという認識がされていた時代もあったと聞きます。「山芋変じて鰻と化す」はこれに由来する言い回しですが、自然薯が大変高額になった昨今、本来の意味からは少し外れてしまっているような気がします。

さて、今回も恒例の謝辞を。

本作の表紙・題字は、四番勝負と同じくサバ缶様にお願いたしました。白玉楼の庭師としての側面を描

いていただいた素晴らしいイラストを頂けましたこと、急なスケジュールの中で対応していただいたことに心より感謝いたします。ありがとうございます。

また、「幻想郷の鰻」執筆にあたり川崎読書会主催の辻堂基信様に大変お世話になりました。この場を借りてお礼をさせていただきます。

———それでは。

また次の機会にお会いできることを願って。

**【奥付】****「魂魄妖夢四番勝負・番外」**

初版 平成29年5月7日  
博麗神社例大祭14

オルハザカサンバンチ  
発行 折葉坂三番地

(<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>)

あかがねおりは  
著者: 銅 折葉 (@domioriha)

表紙: サバ缶様 (@sabakan8446)

(<http://www.nicovideo.jp/mylist/42099958>)

印刷所: (株)ポプルス

※本作は「上海アリス幻楽団」様の「東方 project」  
の二次創作です。



著：銅折葉／折葉坂三番地  
<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog>

表紙・題字：サバ缶 様  
<http://www.pixiv.net/member.php?id=968206>